

# 学位論文審査結果の要旨

所 属	三重大学大学院医学系研究科 看護学専攻（博士後期課程） 看護学領域 母子看護学分野	氏 名	松本 留
審 査 委 員	主 査 松 岡 真 里 副 査 榊 屋 正 浩 副 査 福 録 恵 子		
<p>（学位論文審査結果の要旨）</p> <p>思春期にある子どもの1型糖尿病管理に関する研究 Type 1 diabetes management in adolescents</p> <p>筆者は論文において以下の内容を述べている。</p> <p>本研究は、日本において、小児期医療から成人期医療への移行支援の重要性が高まる中、思春期にある子どもの1型糖尿病管理について、親子双方の視点から管理状況を明らかにし、包括的な移行支援を検討することを目的とした。</p> <p>本研究は、1型糖尿病管理責任を評価できる尺度である Diabetes Family Responsibility Questionnaire（以下、DFRQ）の日本版を作成し、その信頼性と妥当性を検証する第1研究、思春期における1型糖尿病管理に対する親子の認識を明らかにすること第2研究、第1研究で作成した DFRQ を用いて、思春期の1型糖尿病管理責任の状況及び関連する心理・社会的因子を明らかにする第3研究で構成した。</p> <p>第1研究では、まず、DFRQ の翻訳、逆翻訳、逆翻訳版の原作者確認を行い、DFRQ 日本版を作成し、1医療機関に通院する12～18歳の1型糖尿病の子どものとその保護者31組を対象に調査を行った。その結果、Cronbach's alpha が、子ども評価 <math>\alpha = 0.784</math>、保護者評価 <math>\alpha = 0.687</math>、既知集団妥当性では、子どもの評価の DFRQ が子どもの年齢と負の相関を認め、収束的妥当性の検証において、子ども評価及び保護者評価の DFRQ と糖尿病自己管理行動に関する事項効力感尺度間の優位な負の相関を認め、信頼性と妥当性が検証された。</p> <p>第2研究では、子ども8名と保護者9名の合計17名に対して、半構造化面接を実施し、親子の認識として、自己管理が進む思春期において、子どもは管理に対して試行錯誤していた一方で、保護者は管理に懸念を抱いていること、1型糖尿病管理の一部で保護者に依存している状況や十分なスキルを持たない管理においては、保護者の関与が継続的に行われていることが明らかとなった。さらに、子どもの将来に対して、子ども自身は具体的な認識を持っていなかった一方で、保護者が1型糖尿病に関連</p>			

する具体的な懸念を抱いており、子どもと保護者の認識に相違があることを明らかにした。

第3研究では、DFQR 日本版を用いて調査を実施し、有効回答 103 組の子どもと保護者を対象に分析を行った。子ども評価の DFRQ ならびに保護者評価の DFRQ において、就学段階間で有意差が認められ、1 型糖尿病管理責任は就学段階の移り変わりに伴い子どもが担うようになっていることが明らかとなった。また、一部の項目において、親子の認識が異なること、就学段階が上がっても子供が責任を担っていない項目があることが明らかとなった。重回帰分析では、年齢、糖尿病自己管理行動に対する自己効力感、社会的支援と仲間、身体的幸福感、性別が 1 型糖尿病管理責任に影響する心理・社会的因子であることが明らかとなった。

本研究では、1 型糖尿病管理を客観的に評価できる尺度が作成され、管理責任について、子どもと保護者双方の視点から捉えるとともに、成長・発達、糖尿病管理行動に対する自己効力感、家族、社会的支援と仲間、将来の視点を踏まえた移行期支援の提言につながる示唆が得られた。今後の臨床での実装および介入研究への発展性を含む学術上究めて有益であり、学位論文として価値あるものと認めた。